『On-line みんなで法華経を学ぼう!』 vol.7

Oct.2022

—— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

(みんなで"法華経観"を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 方便品 第二 〈後半〉』 (迹 門・正宗分)

- O『其の習 學せざる者は 此れを 暁 了 すること能わじ』(方便品 八十二頁四行)
- 〇 「習学」の3つのステップ 「<u>聞解 思惟 修 習</u>」

『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁三行)

- ○『若し開解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁三行)
- O『<u>十分の一でも実践できれば</u>、いや、その<u>一つにでも徹することができれば</u>、 りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8 行 / P5・1 行)

※表記 例: (P353・1 行 ✓ P259・7 行) ⇒ (『新釈・文庫版』頁数 ✓ 『新釈・単行本』頁数)

<方便品(前半)の復習>

- 【無問自説】 一 釈尊は誰からも求められず、自ら法華経を説かれた。 今こそ真理を説かなければならないという、釈尊の止むにやまれぬお小。
- ・【随宜説法・むぎせっぽう】― 釈尊
- 【四無量心】— 「慈・悲・喜・捨」。特に「喜・捨」が難しい。
- **【諸法実相】**—「十如是」**一**「我」を捨てた「性」になれば、全てが「寂静の世界」。
- •【一**念三千】** すべての現象は自分の心の現れ。すなわち「人生は変えられる」。
- ・【三止三請】 大切なのは、「教えを求める強い求道心」。舎利弗の熱烈な求道心があったから、法華経が説かれた。一人の求道は一人の功徳で終わらない。 舎利弗のような強い求道心を、私は具えているか?
- •【五千起去】一「<u>慢心」「憍慢」(知ってる・やってる・わかってる</u>) は、 教えを「聞かない、聞けない」**⇒そのために**苦の人生へ向かう。 大切なのは**「謙虚」「素直」。⇒幸せな人生への近道。**

- ・【開示悟入】 仏の一大事因縁。仏の本願。
 - ⇒信仰の目的は「仏の智慧を得る」こと。

また、私が人に触れる時に一番大切なことは、相手の「仏性・徳分」を 「開示」できるか。そして相手はそのこと (仏性・徳分) を具えている ことを「悟」れば、自ら仏道・一仏乗へ「入」って行く。

\Diamond \Diamond \Diamond

<方便品(後半)のあらすじ>

【 仏の悟りへと導くため、真理を三つに分けて説く『開三顕一』]---

『諸仏出世の一大事因縁』である《開示悟入》を説かれた世尊(釈尊)は、さらに言葉を強めて舎利弗(しゃりほつ)に説かれました。

【六七頁 二行】(『諸佛如來は但(ただ) 菩薩を教化したもう~ 如來は但(ただ) 一佛乘を以ての故に、 衆生の為に法を説きたもう。餘乘(よじょう)の若(も)しは二、若(も)しは三あることなし』) 「よいですか。仏は、ただひたすらに『菩薩を教化する』ために法を説くのです。仏がこれ まで様々な方法を用いて教えを説いてきたのは、ほかでもありません。衆生に『諸法実 相』を知る《仏の智慧・仏知見》を悟らせるためであったのです。舎利弗よ。仏が法を説 く目的はただ一つです。『全ての人を差別することなく平等に仏の境地(一仏乗)へ導く』ため です。この目的のために仏は法を説くのであって、その他の目的などありません。です から仏の教えに、第二の教えや第三の教えなどというものはありません。仏が《声聞 乗》《縁覚乗》《菩薩乗》の三つに教えを説き分けてきたのは、あくまでもただ一つの 目的である『真理を示すため』であるのです」

—【月三頭一】

【過去世の諸仏の『開三顕一』]---

【六七頁 五行】「しかもこうして『真理』を説き分けるのは私だけではありません。あらゆる国土(世界)の仏も / (『過去の諸佛も~』) 《過去世の仏》も同じです。全ての仏は私と同様に様々な『方便』を用い、過去の実例や譬えを引用し、論理的に説明したりして、衆生のために教えを説くのです。 / (『是(こ)の法も皆(ムな)一佛乘の鳥の故(ゆえ)なり』) それというのも、それはただ一つ、『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗) 「こまで導く』」という目的を達成するために行うのです」

【未来世の諸仏の『開三顕一』]---

【六七頁終四行】(『舎利弗、未来の諸佛の當(まさ)に世に出(い)でたもうべきも~』) 「舎利弗よ。これから現われる《未来世の仏》も同様です。様々な『方便』を用い、過去の実例や譬えを引用し、そして論理的に説明したりして衆生のために教えを説きます。 / (『是(こ)の法も皆(みな)一佛乘の為の故(ゆえ)なり』) これもやはり『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)にまで導く』というただ一つの目的を達成するために行うものです。そしてそれによって仏の教えを聞く者は、 / (『究竟((きょう)して皆(みな)一切種智(いっさいしゅち)を得(う)べし』) 最終的にはみんな『最高の智慧』を得るようになるのです」

【現世の諸仏の『開三顕一』]---

【六七頁終行】(『舎利弗、現在十方の無量百千萬の佛土の中の諸佛世尊の~』) 「舎利弗よ。現在あらゆる世界に存在する無数の《現世の仏》も同じです。現世の諸仏もまた、 / (『是(こ)の法も皆(みな)一佛乘の為の故(ゆえ)なり』) すべての人たちを仏の境地に導くという、ただ一つの目的のために法を説くのです。そしてそれらの仏のもとで教えを聞く者は、 / (『究竟((きょう)して皆(みな)一切種智(いっさいしゅち)を得(う)』) 究極において皆、最高の智慧を得ることができるようになるのです」

【あらため『開三顕一』を強調 《但(t/t/) 菩薩を教化したもう》】——

【六頃四行】(『舎利弗、是(こ)の諸佛は但(ただ) 菩薩を教化したもう』) 「舎利弗よ。仏は『<u>菩薩の道』を説き</u>、全ての者たちに『<u>菩提心を起こさせしめる』</u>ために法を説くのです。人々に仏の智慧を示し、悟らしめ、あらゆる人々を仏の智慧を成就する道へと導き入れるために行うものなのです」

【六八頁 七行】(『諸(もろもろ)の衆生に種種(しゅじゅ)の欲・深心(じんしん)の所著(しょぢゃく)あることを知って』) 「仏は衆生の様々な欲や、心の奥深くにしみつく貪欲の心を知っているために、一人ひとりに応じて巧みに『方便』を用いて法を説くのです。仏がなぜ、『方便』を駆使するのかは、『全ての人々を差別することなく、平等に仏の境地(一仏乗)に導く』というただ一つの目的を達成する願いがあるからです」

【六八頁 終三行】(『舎利弗、十方世界の中には尚(な) お二乗なし』) 「舎利弗よ。この全宇宙で、究極の教えが二つ存在することなどあり得ません。ましてや三つあるはずもありません。 / (『諸佛は五濁(ごじょく)の悪世に出(い)でたもう』) 諸仏は『五濁(ごじょく)の悪世』に仏は出現するのです。この《劫濁・こうじょく/マンネリ化》《煩悩濁・ほんのうじょく/煩悩が盛ん》《衆生濁・しゅじょうじょく/譲る心がなく我を一方的に通す》《見濁・けんじょく/自己本位の見方を強引に通す》《命濁・みょうじょく/目先の利益だけを求める》という乱れがはびこる悪世に生きる人々は / (『衆生垢(く)重く慳貪(けんどん)嫉妬にして、諸(もろもろ)の不善根(ふぜんごん)を成就するが故に』) 心の垢が大変深く重く、貪(むさぼ)り、物惜しみ、妬(ねた)みという悪心が自分の心を占領しているために、仏の教えを聞いても、到底、正しく理解するということができません。 / (『諸佛、方便力を以て、一佛乘に於て分別して三と説きたもう』) 仏はそうした者たちのために《一仏乗の教え》を、それぞれの機根に応じて説き分けるのです。まさに『方便力』をもって三つに分けて導くのです」

【『一仏乗』の教えを理解できない者は、仏弟子に非ず】――

【六九頁二行】「もし私の弟子の中で『私は《阿羅漢・あらかん》である』。『私は《縁覚》である』などと言っても、 / (『諸佛如來の但 (ただ) 菩薩を教化したもう事 (じ) を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非 (あら) ず、阿羅漢 (あらかん) に非ず、辟支仏 (びゃくしぶつ) に非ず』) 『仏が法を説くのは"菩薩の道"を歩ませるために説くのだ』ということを理解しない者は、私の真の弟子ではありません。また本当の阿羅漢・縁覚でもありません。そして、『阿羅漢・縁覚』の境地にいて『仏の智慧を得る』ことを目指さない者は、 / (『此の輩 (ともがら) は皆 (みな) 是(こ) れ増上慢 (ぞうじょうまん) の人なり』) 悟っていないものを悟っていると誤解するうぬぼれた人・増上慢(ぞうじょうまん)の人だと言うべきです」

【六九頁終四行】「ただし私が入滅した後で、仏がいない時は別です。なぜなら仏がいない ために、この教えを正しく受持し、理解することが大変難しいため、そのような人たち を増上慢の人だとするのは気の毒です。しかしそのような人でも、もし他の仏に出会う ことができれば、必ず究極の悟りを得ることが出来るようになります」

【六九頁 終行】(『舎利弗、汝等 (なんだち) 當 (まさ) に一心に信解 (しんげ) し、佛語を受持すべし』) 「舎利弗よ。私が今説いたことを心から信じ、胸に刻みなさい。 / (『諸佛如來は言(み こと) 虚妄(こもう) なし。餘乘(よじょう) あることなく唯(ただ) 一佛乘のみなり』) 仏の言葉には 偽 いつわ りはありません。 仏の教えには、2 番目の教えや 3 番目の教えなどというも のはなく、ただ**『一つの教え』**しかないのです!

【先の『五千起去』した者たちについて言及】―

【to頁-行】すると世尊(釈尊)は、以上の意味を『偈・げ』を以って重ねて説かれました。 【(偈) 七0頁 三行】 「先に五千起去した者たちは、まだ悟っていないのに悟ったと錯覚し、慢 心が強く、自分のあやまちに気付かず、 / (『戒に於て缺漏 (けつろ) 有つて』) そのために 戒律を守ることができていない者たちです。/ (『其(そ)の瑕疵(けし)を護(まも)り惜(おし) <u>む</u>』) その者たちは、自身の欠点を知っておきながら、そのことに向き合うこともなく 妥協して、目先のことしか考えないその場しのぎ、易(ヤッチ)きにつく身勝手な精神の持 ち主でした。 / (『佛の威徳 (いとく) の故 (ゆえ) に去りぬ 斯 (こ) の人は福徳勘 (すくな) くして 是(こ)の法を受くるに堪えず』) それゆえ、仏の境地があまりにも高いため、その教えに 堪えることができずに去って行ってしまったのです。この者たちは過去において積んだ 徳が少ないために、この**『最高の教え』**を受け止める力が不足していたのです」 【(偈) 七O頁 七行】 (『此の衆は枝葉 (しよう) なし 唯諸 (ただ もろもろ) の貞實 (じょうじつ) のみあり』) 「しかし、今、ここに残っている人たちは、それに耐えうる実力のある人たち、要 (bts

め)となる人たちです。枝葉の人でなく"幹"の人です」

【これまで『小乗の教え』を説いてきた理由】―

【(偈) 七O頁 終行】 (『鈍根 (どんこん) にして小法を樂 (ねが) い 生死 (しょうじ) に貪著 (とんぢゃく) し』) 「機根が低く、目前の人生苦から逃れることを目的とした信仰だと、求める教えの程度 は低いものとなります。その結果、人生の『変化』にとらわれることから逃れられず、 仏の教えを聞いても、教えの真義を理解できず、菩薩道を正しく実践することができま せん。そのために、相変わらず様々な苦悩に苛 (さいな) まれてしまうのです。 / (『我是 (われこ)の方便を設けて佛慧(ぶって)に入(い)ることを得せしむ』)ですから私は方便を用い て、まずは『現象にとらわれる心を捨てさせ、心の平安を得る』ように仮に導き、そし て、仏の『智慧の入り口』にまで導くのでした」

【すべての者は仏になれる。『二乗作仏』】一

【(偈) 七-頁 三行】 「私はこれまで『すべての人間は、必ず仏に成り得る』と説いてきませんでした。 なぜ説かなかったのか。それは、まだ説くべき時期ではなかったからです。 / (『今正 (いま まさ) しく是(こ)れ其の時なり決定(けつじょう)して大乘を説く』) しかし今こそ、そのことを説く時で す。私は今、強く決心して、この最高の教えを説くのです」

【(偈) 七一頁大行】(『佛子の心浄(こころきよ)く 柔輭(にゅうなん)に亦(また)利根(りこん)にして 無量の諸佛の所(みもと)にして 深妙(じんみょう)の道(どう)を行ずるあり』) 「仏の教えを聞く人たちの中には、『心が清く、教えに対して素直で正直な人』がいます。 私はその人のために、これから最高の教えを説くのです。 私はその人たちが、未来に於いて必ず仏になるということを保証しましょう。 このような人たちは、常に心の奥深くで仏を念じている人ですから、未来で『成仏する』ということを聞けば、言い知れぬ大歓喜を心から覚える人たちです。 その人が、たとえ声聞であれ、縁覚であれ、そして菩薩であっても、/(『皆(みな)成佛せんこと疑(うたがい)なし』) 必ず「仏に成る』ことには疑いがありません。『真実の教え』というものはただ一つしかないのです。 2番目の教えや3番目の教えというものは無く、すべては『仏の智慧』を説くために説かれたものです。 なぜならば、 / (『諸佛世に出(い) でたもうには 唯(ただ) 此の一事のみ實なり』) 仏がこの世に出て来た理由は、この『仏の智慧』を説くためであるからです」

【個》七二頁四行】「仏は一切衆生を救い、みんなを『仏の境地』に導こうと、あの手この手を用いて手を尽くします。仏は最高の教えを悟っているのですから、 / 『若し小乗を以て化(け)すること~ 我則(すなわ)ち慳貪(けんどん)に墮(だ)せん』) 人々に小乗の教えしか説かないという法惜(ほうお)しみはしません。 / (『諸法の中の悪を斷(だん)じたまえり』) 法惜しみは〈悪〉であり、そのような〈悪〉は仏の中にはありません。仏は人を導くときに報いを求めたり、人が仏になるのを妬(ねた)むような気持ちなどは一切ありません。 / (『光明世間を照す 無量の衆に尊まれて 為に實相の印を説く』) 仏は世界に光明を与え、無数の人々のために『諸法実相』を説くのです」

【悟りを得た時の仏の『大誓願』】---

【(傷) 七二頁終三行】「舎利弗よ。次のことをよく知っておきなさい。じつは仏が悟りを得た時、仏は大きな誓いを立てたのでした。 / 『一切の衆をして 我が如く等しくして異(ことな)ることなからしめんと欲しき』) それは『一切の人間を私と同じ仏の悟りに導く』と言う大誓願です。それを今、果すが出来ます。しかし尊い最高の教えをそのまま説くと、無智の人は頭が混乱し、思い違いをしたり、戸惑ってしまい教えを正しく受け入れることが出来なくなる恐れがあるのですが、仏はなぜそうなるのかという理由を知っています。 / (『此の衆生は 未だ曾(かつ)て善本を修せず 堅く五欲に著(じゃく)して 癡愛(ちあい)の故に惱(なやみ)を生ず』) 教えを正しく受け取れない人は、そもそもが、『善行を行うことが出来ず』、五官の欲望に執着し、そのために様々な悩みを引き起こしてしまいます。 / (『諸欲の因縁を以て 三悉道に墜墜(ついだ)し 六趣の中に輪廻して 備(つぶ)さに諸(もろもろ)の苦毒を受く』) そういう様々な欲望や執着の心でいると、『六道』を輪廻して地獄道や餓鬼道、畜生道に陥(おちい)り、結局はさまざまな『苦』を受けることになってしまうのです」

【六道輪廻し、再び生まれ変わって母の身に"いのち"を宿す】---

【(偈) 七三頁四行】 (『受胎の微形 (みぎょう) 世世に常に増長 (ぞうちょう) し 薄徳 (はくとく) 少福の人として 衆苦 (しゅく) に逼迫 (ひっぱく) せらる』) 「欲望に執着し、『<u>最高の教え』を素直に受け入れることが出来ない人が人間に生まれ変わる時</u>、前世の悪い業を背負ったまま再び母の胎内に入って行くことになります。そして生まれ変わるたびに自らの『悪業』を増し、

積み重ねて行くようになり、結果的に、**『徳が少なく、幸せの薄い人』**として生きることになります。そして再び生まれ変わっても、結局は様々な苦しみに身をやつし、いつまでも苦しみの人生を送ることになるのです」

【仏は人々の根性欲にんじょうよく)を知り、機根に合わせて種々の法を説く】――

【個】七三頁五行】 (『邪見の稠林 (ちゅうりん) 若しは有 (う) 若しは無等 (むとう) に入 (い) り』) 「世の中には数多くの正しくない思想がはびこっています。その誤った思想の中に入ってしまうと、迷い込むと出て来れない深い密林に入るような状態になります。今でも (釈尊在世当時のインドでは)、民衆を真に救うことができない空理空論の誤った哲学・思想が 62派もあります。その哲学・思想を持つ人たちは、自分の思想や自説こそが正しいと信じ込んでいるため、その誤った哲学・思想を捨てることができません。自分の考えは正しいと『慢心』しています。ですから仏がそばにいても、 / (『亦(また) 正法を聞かず 是 (かく) の如き人は度し難し』) 正しい法を聞くことができず、未来永劫、仏を見ることが出来ません。こうした人々は誠に救いがたいのです」

【(偈) 七三頁 終四行】「舎利弗よ。私はそうした人々を救うために『方便』を用いて、まずは手はじめに『人生苦を救う法』を説き、『現象の変化から超越し、解放される』ところに『心の平安』があると説きました。しかし、この『現象の変化』から解放された平安の境地というものは、それは『真の悟りの境地・涅槃』ではありません。 / (『諸法は本(もと)より来(このかた) 常に自(おのずか)ら寂滅(じゃくめつ)の相なり』) 『真の悟りの境地』を得るためには、『諸法実相』を悟り、そして修行を完成させることによって、 / (『來世に作佛(さぶつ)することを得ん』) 来世において必ず『仏に成る』にとが出来るようになります」

【(偈) 七三頁 終行】「私は『方便力』を用いて、ただ一つの『真実の法・真理』を、三つに説き分けてきました。全ての仏は私と同様に、最終的には『真実の法・真理』を説くのです。皆さん。今こそ『疑う心』を捨てて教えを聞かなければなりません。諸仏の説く言葉には違いなどありません。全て同じです。諸仏が説く『真実の法・真理』はただ一つで、二つはないのです。過去からの無数の仏は様々な『方便力』を用いて、ただ一つの『真実の法・真理』を説いてきました。そして、それによって無数の人々を仏道へ導き入れてきました。 / 『深心(じんしん)の所欲を知(しろ)しめして 更に異(い)の方便を以て』) それができたのも、諸仏は人々の心の奥にある全ての欲望を知り尽くしている</u>ためで、だからこそ『方便』を適切に用いることが出来るのでした」

【『万善成仏』(あらゆることが成仏につながる) 】――

【(偈) 七四頁 終五行】「ある人々は過去において仏に出会って仏の教えを聞き、 / (『若(も)しは法を聞いて布施し 或いは持戒・忍辱~ 種種(しゅじゅ)に福徳を修せし』) ①『六波羅蜜』の行を実践しました。それによって、仏道を成就する(仏に成る)ことが出来ました。また仏の入滅後 / (『若し人善輭の心ありし』) ある人々は ②常に自分の人格の向上を志し、素直で柔輭(にゅうなん)な心になることで、仏道を成就することが出来ました」
【(偈) 七四頁 終三行】同様に仏の入滅後、ある人々は仏舎利を供養するために / (『舎利を供養

【(偈) 七四頁 終三行】 同様に仏の入滅後、ある人々は仏舎利を供養するために/ (『舎利を供養する者 萬億種の塔を起(た)てて』) ❸ 仏塔を建立(こんりゅう) し、金銀、宝をもって供養しました。 / (『乃至(ないし)童子の戯(たわむれ)に 沙(すな)を聚(あつ)めて佛塔と爲(せ)る』) また、

子どもたちが遊び半分で砂を集めて仏塔を作ったりしても、それが大きな契機となってその人たちは仏道に入り、ついには仏と成ることが出来たのでした」

【傷】七五頁四行】(『若(も)し人佛の爲の故に 諸(もろもろ)の形像(ぎょうぞう)を建立し 刻彫(こくちょう)して衆相(しゅそう)を成せる』)「また、ある人々は仏を慕(した)う心から仏像を造って仏の三十二相の徳相を完成させ、貴金属や木、粘土や漆喰(しっくい)などで ②仏像を造りました。 / 『綵畫(さいえ)して佛像の 百福荘厳(しょうごん)の相を作(な)すこと』) あるいは ⑤仏の徳を絵に表現しました。 / 『乃至(ないし)童子の戯(たわむれ)に 若(も)しは州木(そうもく)及び筆 或いは指の爪甲(つめ)を以て 畫(えが)いて佛像を作(な)せる』) また子どもたちが遊びで草や木の枝、指の爪などで仏の姿を描(か)きましたが、それらが契機となってその人たちは仏道に入り、段々と徳行を重ねて、ついには仏と成ることが出来ました。そして、ただ菩薩たちを教化して、無数の大衆を救ったのであります」

【(偈) 七五頁終行】(『若し人塔廟(とうちょう)寳像(ほうぞう)及び畫像(えぞう)に於て 華(け)・香・梅蓋(ばんがい)を以て 敬心(きょうしん)にして供養し』) 「もしある人が ④ 仏塔や仏像、仏画に花や香を供え、旗を立てるなどして様々な供養したとしましょう。 あるいは音楽を奏し、讃歌を歌ったとしましょう。 たとえそれが小声で歌ったとしても、 そのことが契機となってその人は仏道に入り、 功徳を積んで、 ついには仏と成ることが出来るのであります」 【(偈) 七六頁四行】(『若し人散亂(さんらん)の心に 乃至(ないし)一華(いちけ)を以て 畫像(えぞう)に供養せし』) 「もしある人が他に気を取られて落ち着かない心で仏像や仏画に、たった一輪の花を供えたとしましょう。 また、 ② 仏像を丁寧に正しく礼拝した人はもちろん、/ (『乃至(ないし) 一手(いっしゅ)を睾(あ)げ 或いは復(また)少し頭(こうべ)を低(た)れて 此れを以て像に供養せし』) 片手だけで拝み、ほんの少し頭を下げるという省略した簡単な礼拝であったとしても、 その人はそれが契機となって仏道に入り、精進を重ね、 ついには仏道を成就し、 ひろく無数の人々を救うことになります」

【(傷) 七六頁終四行】 (『若し人散亂 (さんらん) の心に 塔廟 (とうみょう) の中に入 (い) って 一 (ひとたび) 南無佛と稱 (しょう) せし』) 「ましてや仏塔や仏廟 (ぶつびょう) で、他の物事に気を取られて落ち着かない心で、 (3) たった一声『南無仏』と称(とな)えたとしても、それが契機となってその人は仏道に入り、ついには仏と成ることが出来るのです」 —— 【フラ 善 反 (人)

【一人として成仏しない者はいない】――

【(傷) 七六頁 終三行】「遠い、遠い過去からこれまで、仏の在世や滅度の時において教えを聞いた者は、皆すでに仏道を成就する(仏に成る) ことが出来ました。これから未来に於いても無数の仏が現われますが、それらの仏も多くの人々を救い、仏の智慧を得るために導いてくれます」

【(偈) 七七頁 二行】(『若し法を聞くことあらん者は 一 (ひと) りとして成佛せずということなけん』) 「 もし仏の教えを聞くことができれば、一人として成仏しない者はいません。 / (『諸佛の本誓願は 我が所行の佛道を 普く衆生をして 亦 (また) 同じく此の道を得せしめんと欲す』) 仏の本当の願いとは、私がたどって来た『仏への道』を、全ての人が私と同じように歩み、達成することであります」

【(傷) 七七頁四行】「これから未来に現われる無数の仏も、様々な教えを説きますが、そのすべての教えも、ただ一つの『真実の法・真理』を説くためであります。 / (『佛種は縁に

従(ま)って起ると知(しろ)しめす』)一人ひとりが具えている仏の種(仏性)は、触れる縁によって花咲くのです。仏はこのことを知っていますから、『一乗の教え』すなわち『真実の法・真理』を説くのです。この教えは永遠不滅の教えです。この世はこの教えのごとくに成り立っています。 / (『是(こ)の法は法位に住して 世間の相常住なり』) したがってこの教えに基づいて行動する限り、千変万化する諸現象にとらわれず、すべてが「調和していることが理解できるようになります。 仏は『真理』を悟っていますので、様々な『方便』を用いることができます。 そして、多くの人を正しく導くことが出来るのです」
【(偈) 七日 終五行】「この世には、天上界から人間界の人々から供養・讃歎される仏がいます。それらの仏は人々を安穏へと導くため、様々な方便を用いて様々な法を説くのであります。じつは私もそれらの仏と同様に / (『我も亦是(またかく)の如し 衆生を安穏ならしめんが故に 種種(しゅじゅ)の法門を以て 佛道を宣示(せんじ)す』) すべての人を『安穏で円満な境地』に導くために、様々な教えを用いて仏道を示すのです。そして私はあらゆる人々の性質・欲望・機根を知り分けて適切に法を説きますから、すべての人たちを歓びに満たして導くことが出来るのです」

【五欲に執着する衆生の様子】――

【偈) 七八頁四行】「舎利弗よ。よくお聞きなさい。私が仏の眼をもって六道にさまよう衆生を見ると、 / (『貧窮 (ဟんぐ) にして 福慧 (ふくえ) なし』) 『心が貧しく・福徳に欠け・本能のままに生きているために、智慧がない》</mark>|| 状態でいます。 / (『生死 (しょうじ) の險道 (けんどう) に入 (い) って 相續 (そうぞく) して苦斷 (た) えず』) そのために、次々に襲ってくる『変化』に堪えられず、険しい人生の悪路を歩み、次から次へと絶えることなく苦しみ続けていくのです。五欲に執着する衆生は / (『麓井 (みょうご) の尾を愛するが如し』) まるで養牛(みょうご・ヤク)が、自分の尾を大事にしている様子と同じように見えます。 辞牛 (みょうご) は自分の尾を丁寧に毛づくろうために尾が美しくなり、人はその美しい尾を手に入れるために犛牛 (みょうご) を殺します。 犛牛 (みょうご) というものは、わざわざ殺されるために自分にとって大した役にも立たぬ尾に執着し、大事に毛づくろっているのですから、誠に愚かというほかありません。 人も犛牛 (みょうご) と同じです。必要以上の欲望を持ち、執着するために、『真実の姿』が見えず、自ら不幸を招いているのです。私はこのような衆生を見て、その苦しみから救ってあげたいと心から思っているのです」

【悟りを得た時に誓った仏の『大誓願』】――

【個》七八頁 終四行】「私はブッタガヤーの菩提樹下で悟りを得ました。そして21日間、その悟りの内容を自身の中でかみ締め、振り返りました。その時私が思ったことは、私が悟ったこの『真理』は最高の教えであるために、とうてい言葉に尽くして表現することが出来ず、人々には理解できるものではないと考えました。だから人々に説くことは辞めようと思いました。しかし諸々の梵天、神々が降臨し、この『真理』を説くように請(こ)われたのです。私は大変悩みましたが、過去世の仏が『方便力』を用いて法を説いたことに考え及んだ私は、ついに重大な決意しました。それは『自分が悟った《真理》を、かつての仏がなされたように、/(『我が今得())る所の道も 亦(また)三乗と説くべし』)《真理》を三つに説き分けることにしよう』と決心したのであります」

【(傷) 七九頁 六行】「私がそう決意した時、十方世界から諸仏が身を現わし、次の言葉を述べてねぎらってくれました。『善いかな。釈迦牟尼仏。あなたは最高の教えを体得し、それを私たち諸仏と同様に《方便力》を用いて説き示すことを決意してくれました。あなたが決意したことと同様に、私たちはこれまで最高第一の教えを三通りに分けて説き示し、人々の機根に応じて法を説いてきましたが、それは全て仏の智慧を伝え、《菩薩》を教化せんがためであったのです』と十方世界の諸仏が私の決意を讃え、私のこれからの努力に対してねぎらいの言葉をくれたのであります」

【方便を用いて『真理』を説く決意】――

【(偈) ハ〇頁 六行】 「舎利弗よ。よく聞くのです。私には数多くの仏弟子がおり、それらの者 <u>たちは皆、 /(『曾(かつ)て諸佛に從いたてまつりて 方便所説の法を聞けり』) 過去世</u> において多くの仏に仕え、**『方便』**をもって説かれた教えを聞いて来た人々です。その者 たちを見て私は心から思いました。 / (『如來出 (い) でたる所以 (ゅぇん) は 佛慧 (ぶって) を説かんが爲の故なり 今正しく是(こ)れ其の時なり』) 『私は仏の智慧を説くためにこ の世に生まれ出(い)でたのであるから、教えを説かなければならない、今こそ、その時です。』と」 【(偈) 八〇頁 終三行】 「舎利弗よ。機根が低く、自分が正しいと自惚れている増上慢 (ぞうじょうま ん) の者は、この教えを正しく理解することは出来ないでしょう。しかし私にはもはや、 ためらいや畏れはありません。 / (『正直に方便を捨てて 但 (ただ) 無上道を説く』) 私 は『方便』の教えでは無く、仏の悟りである無上道の教え・真理をそのまま説くことにしたので す。これによって菩薩たちはすべての疑念を晴らすことが出来、今ここにいる1200 人の阿羅漢 (あらかん) たちは、必ず仏の悟りを得ることができるようになるでしょう」 【(偈) 八-頁 -行】(『三世諸仏の説法の儀式の如く』) 「過去・現在・未来の三世の諸仏が 法を説かれた方法のように、私も初めは『方便』の教えを説き、その後、機が熟するのを 見て**『真実の教え・真理』**を説くのです。仏が世に出るということは、誠に稀 (まれ) なこと です。そしてたとえ世に出て来ても、この最高の教えを説くということは、さらに稀な ことです。ですから無限の長い年月の間で、この最高の教えを聞くことは、本当に有り 得ない貴重なことです。ですから教えを聞いて『歓喜』を覚える人は、三世の全ての仏 を供養する尊い人だと言え、それはまさに三千年に一度、花を咲かせる『優曇華(シヒムメサン』 に出会うことにも勝(まさ)る稀有(けう)の人だと申せます」

【『一乗真実』を説く決意。重ねて《但(ヒセン菩薩を教化したもう)を強調 】-【(偈) ハー頁 ハ行】 「皆さん。 ゆめゆめ疑いなど持ってはなりません。 私は全ての教えを知り 尽くしている『教えの王』です。その私が宣言します。/ (『但 (ただ) 一乘の道を以て 諸 (もろもろ) の菩薩を敎化して 聲聞 (しょうもん) の弟子なし』) 『これから《一乗の教え》 を説いて、菩薩だけを教化します。私にはもはや声聞の弟子などはいません』。舎利弗 よ。すべての声聞よ。菩薩たちよ。/(『是(こ)の妙法は 諸佛の秘要(ひょう)なり』) この甚深微妙の教えは、仏が一番大事にしている教えであり、めったに説かれる教えで はありません。五濁の悪世では、人々は欲に溺れ、執着の心でいっぱいであるため、 人々は仏の道を求めることはしません。ですからこれから先の智慧を持たない人々は、 / (『迷惑して信受 (Lhじゅ) せず 法を破 (は) して悪道に墮 (だ) せん』) 『真理の教え』を 聞いても、理解できないばかりか、むしろ教えに反抗的になり、最悪の不幸に陥(おちい) って行くでしょう。/ (『慚愧 (ざんぎ) 清浄 (しょうじょう) にして 佛道を志求 (しぐ) する者 あらば 當(まさ)に是(かく)の如き等の爲に 廣(vろ)く一乘の道を讚(は)むべし』) し かし、そういう人のなかで自分の至らなさに気付き、徐々に素直な心になって仏道を求 めようする人がいたならば、その人のためにこの**『一乗の道』**を教えを褒(ほ)め讃えて、 教えを勧めなさい」

【法を実践しない者は、教えの真意を理解できず、人生の日の出を見られない】---

【(傷) 八二頁二行】「舎利弗よ。よくお聞きなさい。/ (『諸佛の法是 (ゕく) の如く 萬億の方便を以て宜(ょろ) しきに隨(したが)って法を説きたもう』) 諸仏は無数の『方便』を用いて、その人に相応(ふさわ) しく教えを説くものです。/ (『其(も)の習学(しゅうがく) せざる者は此れを暁子(ぎょうりょう) すること能(ぁた) わじ』) 仏の教えを学び、実践しない人は、仏の教えの真意を理解できず、その人の人生は闇夜のままで、日の出を見ることが出来ません。/ (『復(また)諸(もろもろ)の疑惑なく 心に大歓喜を生じて 自(みずか)ら當(まさ)に作佛(きぶつ) すべしと知れ』) どうか疑惑を持たず、真理を知る喜びを感じ、将来、必ず仏に成ることを信じてください。この『必ず仏に成れるのだ』と言うことを、大歓喜をもって認識しましょう」と世尊は説かれたのでした。



『諸佛如來は<u>恒菩薩を教化したもう</u>。~ 餘乘。の若しは二、若しは三あることなし』 (六七頁 二行)

だ 但菩薩を教化したもう

(P362 · 3 行/P275 · 6 行)

菩薩だけを教化して、ほかのものはかまわないというのではなく、―― 人によって早い遅いのちがいはあっても、とにかく菩薩道という一つのルートをすべての人にしらせるのが、仏の教化であるぞ―― という宣言なのです

大切な所です。いわゆる〈**開三顕一(三乗を開いて一乗を顕わす)〉**の宣言です。前にも度々のべましたように、仏の願いというものは、全ての人を仏の境地へ導きたいという一事につきるのです。~ ところが、仏の目から見れば、究極においては声聞・縁覚・菩薩というような違いはないのです。 一 声聞も、縁覚も、自分では気がつかないでいるけれども、じつは仏の境地へ達する道を歩んでいるのであって、今はその途中の段階にいるというだけのことなのだ しいうことを見通しておられるからです。

あるのはただ一仏乗

(P363·終5行/P276·5行)

一仏乗というのは、結局「全ての教えが一切衆生を仏の境地へ導くための教えである」ということです。 —— 二つや三つの教えがあるように見えるのは、仏の方便によってそれぞれの段階の人にふさわしい教えを説いたまでのことであって、仏の真実の教えというのはあくまでも一つしかないのだ —— というのです。これが〈一仏乗〉の意義であります。

『諸の衆生に種種の欲・深心の所著あることを知って、其の本性に隨って、

種種の因緣・譬喻・言辭・方便力を以ての故に、而も爲に法を説く。舎利弗、

此の如きは皆一佛乘の一切種智を得せしめんが爲の故なり』 (六八頁 七行)

『一佛乘の爲の故なり』 (六七頁 四行・七行・終二行/六八頁 三行・終三行/七〇頁 一行)

ごじょく あくせ 五濁の悪世

(P372·3行/P284·4行)

『諸佛は五濁の惡世に出でたもう』 (六八頁 終二)

仏がこの世に出られて教えを説かれるのは、よくよくの時であります。世の中に汚れが満ち満ちて、どうにもならない時に、それを救うために仏は出現されるのです。その世の汚れ・濁りというものの原因やありさまを分析してみると、大体五つにわかれるというので『五濁の悪世・ごよのがせ』といいます。

- 《**劫濁・こうじょく》一** 時代が長く、古くなったためにおこってくる悪。 マンネリ化してい <u>る状態</u>。こういう時こそ仏の教えによって「人間の生きることの意味・使命」をもう 一度見直さなければならない。

《煩悩濁・ぼんのうじょく》一<u>煩悩・我儘がますますさかん</u>になるために起こる濁り。

《衆生濁・しゅじょうじょく》 — 一人ひとりの立場、性質が違うところから出る世の濁り。 「譲る精神」が少なくなり、全体の調和を害する「我」「立場」を一方的に通す。

《見濁・けんじょく》 — ものの見方がそれぞれ違うために起こる世の乱れ。 <u>邪見(じゃけん・</u> 狭い自己本位の見方)が横行して正見を蔽(おお)ってしまい、世が濁る。

《命濁・みょうじょく》 — 人の寿命が短くなるためにおこる世の濁り。 **目の前の利益や目 先の効果、すぐ効果のあらわれるようなことばかりを追い求める**考えをする。

《思惟のひととき ①》

『五濁の悪世』。私たちの日常で、①《劫濁・こむょ》→『マンネリ化』。②《煩悩濁・ほんの むょく》→『煩悩がさかん』。③《衆生濁・しゅじょむょく》→『譲る心がなく我を一方的に通す』。④《見 濁・けんじょく》→『自己本位の見方を強引に通す』。⑤《命濁・みょむょく》→『目先の利益だけを求め る』ということがあるのか? ないのか? — 振り返ってみましょう。

^{さんじょうかいえ} 三乗開会

(P380·2行/P289·終5行)

一つの正法に達する道を、それぞれの機根に応じて三つに分けて説き(**開・かい**)、そうしてだんだんに一つの道へ導いてゆき、最後に全部一ヵ所に会わせること(会・え)を「三乗開会・さんじょうかいえ」と言います。 (声聞→四諦、縁覚→十二因縁、菩薩→六波羅蜜)

『諸佛如來の<u>但菩薩を教化したもう事を聞かず知らずんば、此れ佛弟子に非ず</u>』 (六九頁 三行)

(P382・7 行/P291・7 行)

仏の教えというものは〈すべての人を仏の境地にまで導く〉というのがただ一つの目的なのですから、現在自分が達している境地で満足して、人を教化したり、人を救ったりする仕事へ入ろうとしない人は、本当の仏弟子だとはいえないのです。

『使ち復阿耨多羅三藐三菩提を志求せざらん。當に知るべし、此の 輩 は皆是 れ増上慢の人なり』 (六九頁 六行)

菩薩行によって仏の智慧の完成を求めない修行者は仏道修行者とはいえない― と言い切っておられるその厳しさに、身の引き締まるのを覚えます。 (P386・終2行/P295・1行)

『佛の滅度の後、現前に佛なからんをば除く』 (六九頁 終四行)

今こうして法華経を受持し、学ぶことができるのは、現前に仏がおられるのと同じだと思わなければなりません。~ 我々はあくまでも釈尊の教えられた最高の道を目指して進まなければ、仏弟子とは言えないのです。 (P387・4 行 / P295・5 行)

《思惟のひととき ②》

「現在自分が達している境地で満足して、人を教化したり、人を救ったりする仕事へ入ろうとしない人は、本当の仏弟子だとはいえないのです」と開祖は説かれます。

一では、「そこそこ私は幸せだから、特別に精進する必要はない」、「私は現在の状況(境地)で十分満足だから、これ以上精進を深める必要はない」。または「もう私は救われることはないから、これから精進をしたところで無駄だ」「どうせ救われないのだから、これからの精進はあきらめよう」など、そんなことを考えてしまう自分がいるのか? いないのか? 振り返ってみましょう。

『戒に於て飲漏有って 其の瑕疵を護り惜む』 (七〇頁四行)

(五千起去した人) この人たちは**(怖勝順劣戒・ふしょ)じゅんれつかい**において欠けているのだと解釈されています。すなわち (勝(すぐ) れたるを怖(おそ) れ、劣るに順(したが) う〉で、ひじょうに優れた教えに対しては、とても難しくて手に届きそうもないと恐れをなし、それよりも低い教えに対しては、これぐらいならちょうど手ごろだと考えてもそれに順(したが) うという、消極的な、妥協的な、卑怯な精神です。~

最初から七十点ぐらいを最終目標とするような、肝っ玉の小さな人は、自分の欠点を知ってはいても、それを思い切って切り捨ててしまうような果断さがありません。~ すなわち自分の欠点を知っていながら、それと妥協してしまう消極的な精神です。これも凡夫の特徴であって、そのような人は本当の救いに達することは出来ません。大成することもできません。 (P390・1 行/P297・9 行)

『未だ曾て汝等 當に佛道を成ずることを得べしと説かず 未だ曾て説かざる所以は説時

大事な一節です。 **みんな仏になれる!…この大宣言を、この《法華経》**において、初めて発表されるのです。 **《法華経》**が〈授記経〉だといわれる所以 (ゆえん) はここにあり、また大乗中の大乗である所以 (ゆえん) もここにあるのです。 (P404・7行/P308・4行)

にじょうきぶっ 二乗作仏

(P411·終4行/P313·終2行)

『聲聞若しは菩薩 我が所説の法を聞くこと 乃至一偈に於てもせば 皆成佛せんこと疑なし 十方佛土の中には唯一乘の法のみあり』 (71頁 終2行)

この《**方便品》**は、一言でいえば「だれでも仏になれる」という教えであって、特に声 <u>間・縁覚も仏になれることを、ここで初めて宣言されたものです</u>。それゆれ**『二乗作仏』の 教え**とも言われているのです。

『自ら無上道 大乘平等の法を證して若し小乘を以て化すること 乃至一人に於

てもせば我則ち慳貪に墮せん』 (七二頁 六行)

〈慳貪・けんどん〉・・・慳(けん)とは、自分のもっているものを、他に与えることを極端に惜しむ心、貪(どん)というのは貪り欲する心です。~ 学問にせよ、芸術にせよ、商売の秘訣にせよ、すべてのものごとに共通のことですが、人を教え導く時は、自分の達している最高の境地まで〈惜しみな〈導いてあげる〉という心構えが根本になければ、慳貪の罪をつくることになります。 (P418・1 行/P318・終3行)

《思惟のひととき 3》

仏は〈慳貪・けんどん〉の心がありません。つまり「《慳・けん》自分の持っているものを他に与えることを極端に惜しむ心」と「《貪・どん》貪る心」を仏は持っていないとあります。
── では、私は、人を教え導く時、「自分の知っていることを惜しげなく、全部教える」または、「自分の達している最高の境地まで〈惜しみな〈導いてあげる〉という心構えでいる」ことができているでしょうか? 振り返ってみましょう。

『亦貪嫉の意なし 諸法の中の惡を斷じたまえり』 (七二頁 終五行)

悪とは

(P421·6 行/P321·1 行)

物事の実相を見通せば、悪というものは「実体のないものだ」ということがハッキリします。仏はすべてのものごとの実相を見通している方ですから、もちろん、<u>法惜しみ</u>をして衆生に正しい歩みを止めたりする**〈悪〉**をなさるはずはありません。

「悪」というのは

- ●「修行の歩みをみずから止めること」 あるいは、 ②「逆に後戻りすること」
- ③「人の正しい歩みを止めさせること」 あるいは、 ④「逆に後戻りさせること」⇒ ひいては、人に教えを説かない「法惜(ほうお)しみ」がく悪〉である。

《思惟のひととき ④》

〈悪〉とは「①修行の歩みをみずから止めること / ②逆に後戻りすること / ③人の正しい歩みを止めさせること / ④逆に後戻りさせること」であり、人に教えを説かない「法惜(ほうお)しみ」こそ〈悪〉であると開祖はお教えくださいました。── 開祖のこの教えを、あなたはどのように受け止めますか? 考えてみましょう。

《思惟のひととき 多》

仏は『亦 (また) <u>貪嫉 (とんしつ)</u> の意 (こころ) なし』/人を導いてあげて何らかの報いを求める気持ち (報酬や感謝を求め、名声をあげる気持ち)『貪(とん)』と、人が自分と同じように上達したり、または自分以上に飛び越えていくことを妬 (ねた) む気持ち『嫉(しつ)』、が無いとあります。果して私の心はどうであるか? 振り返ってみましょう。

『聲聞若しは菩薩我が所説の法を聞くこと 乃至一偈に於てもせば 皆成佛せんこ

と疑いなし十方佛土の中には唯一乘の法のみあり』

(七一頁 終二行)

りんねせつ いぎ 輪廻説の意義

(P428·終2行/P326·終7行)

〈生有/しょうう〉・〈本有/ほんぬ〉・〈死有/しう〉 ⇒ 〈中有/ちゅうう〉 ⇒ 〈生有〉・ 〈本有〉・〈死有〉 → 〈中有〉 ⇒ 〈生有〉・〈本有〉・〈死有〉 ······

サルヘゎセック 輪廻説の正しい受け取り方

(P440·終2行/P334·9行)

この輪廻説を、まちがって受け取ると非常に消極的なものになってしまいます。〈私が<u>現在苦しんでいるのは、過去の業があまりに悪いから</u>で、今、何をしてもダメなのだ。あきらめるしかないのだ〉よいうふうに、この世における努力を一切放棄してしまう生き方です。さらに悪いのは、<u>輪廻説で他人を裁いてしまうこと</u>です。〈お前が、現在そういった苦しい目にあうのは過去世になしたお前の業のせいなのだから、あきらめて、現在の生活に甘んじていろ〉などという発言や、発想は、仏教徒として、否、仏教徒であるかないかということより、人間として、してはならないことなのです。

ばんぜんじょうぶつ

(P467·終6行/P355·終7行)

成仏の縁となる「八つの行い」

- ① 六波羅蜜を行ずる。
- ② 仏の滅後にも善輭(ぜんなん・常に向上を志し、真理に対して素直で柔らかな心)を持つ。
- ③仏滅後、仏塔を建て供養し、または子どもがたわむれで砂の仏塔を作る。
- ④ 仏像を彫刻し、鋳造を作る。
- ⑤仏像を描く。または子どもがたわむれで仏の形を描く。
- ⑥ 仏像や仏塔に供物を捧げ、音楽・仏讃歌を歌う。
- ⑦仏を礼拝する。略式の礼拝、片手拝みをする。
- ⑧ ただ一声、「南無仏」と唱える。

しゃくそんだいせいがん 釈尊の大誓願

『我本誓願を立てて 一切の衆をして 我が如く等しくして 異ることなからしめんと

欲しき』 (七二頁 終三行)

『諸佛の本誓願は我が所行の佛道を書く衆生をして亦同じく此の道を得せしめ

んと欲す』(七七頁三行)

ひとりとして成仏しない人はいない

(P470-5 行/P358-1 行)

『若し法を聞くことあらん者は一りとして成佛せずということなけん』(77頁2行)

これこそ、仏がこの世に出現された大目的を端的に言い表した尊いお言葉なのです。
~ なんという有難いお言葉でしょうか。
~ この《法華経》が〈授記経〉といわれる最大
の所以 (ゆえん) が、このお言葉なのです。
~ そして、自分は必ず仏の境地に到達できる
のだと確信できるのです。
~ この法華経を学び、一つでも実践していくうちに、必ず
そういう大歓喜を心から感得できるようになります。それがこの法華経の大功徳なのです。

《思惟のひととき ⑥》

釈尊が「人々を私と同じく仏にするために出現したのだ」という大誓願や、法華経を聞けば「一人として成仏しない者はいない」という釈尊のお言葉を聞いて―― あなたは何を感じますか? またこれからの精進で、私は何を心がければ良いか? 何をすれば良いか? (どういう精進をすることが大切か?) を考えてみましょう。

『佛種は縁に從って起こると知しめす』(七七頁六行) (P475・4)

(P475・4 行 ∕ P361・終 7 行)

「**成仏するということは、『<u>縁起』によるもの</u>であって**、何か特別な存在が成仏したり、他を成仏させたりするものではない」という意味です。つまり、<u>成仏するのもしないも(救われるのも、救われないも)自分の精進次第なのだ</u>ということです。

『六道の衆生を見るに~<u>整牛の尾を愛するが如し</u>』 (七八頁五行)

《思惟のひととき ⑦》

六道をさまよう衆生は、『犛牛(チュラご)の尾を愛するが如し』だと、「自分のために何の役に立たないものに心が奪われ、それに執着しているために、結果的に自分を不幸にしている」と釈尊は説かれています。 ── この経文を噛み締めてみましょう。

『如來出でたる所以は佛慧を説かんが爲の故なり今正しく是れ其の時なり』(八〇頁終五行)

『其の習學せざる者は 此れを曉 了すること能わじ』 (八二頁四行)

《思惟のひととき 8》

『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』の経文を、どのように受け止めますか? 噛み締めてみましょう。

・・・これで《方便品第二》のお説法は終わりになります。 (P523・終2行/P398・3行) 舎利弗をはじめとして、いならぶ声間・縁覚その他の在家修行者たちが、「あなたたちは全て菩薩であり、すべて仏になることのできる身である」と、初めて仏さまのお口から聞かされ、どれほどの歓喜に浸(ひた)ったかは、想像に余りがあります。

なかでも、舎利弗の喜びはいかばかりであったでしょう。その喜びがあふれ出て、心から仏さまにお礼を申し上げたことから、つぎの《譬諭品第三》の説法がはじまります。

《思惟のふいかえり まとめ》

今日の『方便品第二(後半)』の学びを通して、何を学び取ったか? (または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

以上